

## 「詠懷」と「言志」

——なぜ阮籍詩は「詠懷」と呼ばれたか

鄭 月 超

はじめに

「詠懷」は、阮籍の作品のタイトルであるとともに、文學の創作營爲を指す語でもある。南宋・張戒の『歲寒堂詩話』卷上に「建安、陶、阮以前の詩、専ら言志を以てし、潘、陸以後の詩、専ら詠物を以てす」とあり、陶淵明、阮籍を含むそれ以前の詩作を「言志」、潘岳、陸機を含むそれ以降の詩作を「詠物」、と二項において捉える。そのうえで、「言志」と「詠物」の兩方を兼ね備えるものとして李白と杜甫の名を擧げる。興味を引くのは、阮籍の詩作を「言志」という言葉で捉えていることである。「言志」の作品としてここで意識されたのは、阮籍の「詠懷」と名づけられた一連の詩作に他なるまい。

阮籍詩群は、難解で晦澁であることにおいて異色の存在であった。そのためか、歴代の多くの注釋者・讀者たちは、作品の奥に隠された本旨を探ろうとしてきた。しかし、タイトルである「詠懷」そのものについての議論はあまり見られない。往々にして「詠懷」という詩題でありながら、「言志」に準ずるもの、あるいは、同じものとして捉えてきた。早いものでは『藝文類聚』が、阮籍の作品を「言志」の部に収める（卷二十六）ほか、宋代では先に擧げた張戒の『歲寒堂詩話』、近代になると朱自清はその論著『詩言志辨』の中で、阮籍詩のタイトルに關して、「詠懷」ではなく「言志」という言葉を用いて差し支えないとまで述べる。<sup>1)</sup>

「言志」とはいうまでもなく、『尚書』舜典、『詩』大序以來、文人の詩觀に大きな影響を與えた語であり、概念である。いつばう「詠懷」は、文字どおり胸のうちの「懷<sup>おも</sup>」いを外に「詠」出することであり、たとえば張戒のように詩作の營爲を「表出（言志）」と「再現（詠物）」とに大き

く二項に分けて考えたとき、「詠懷」と「言志」の本旨は「表出」という點において重なる。ただ、阮籍詩は「言志」と結びつくことなく、「詠懷」と呼ばれるようになり、この呼稱が定着する。

兩者が結びついた経緯をめぐっては、藤井良雄氏がその論考の中で既に言及している。<sup>(2)</sup>氏は陳伯君『阮籍集校注』に見える、「詠懷」という名稱は昭明太子蕭統が十七首を『文選』に採録したときに加えたものである、という指摘を受け、それに先行する資料、鍾嶸『詩品』、江淹『雜體詩三十首』を挙げ、江淹の『雜體詩三十首』に見える「阮步兵詠懷（籍）」が先蹤であり、『詩品』は江淹『雜體詩三十首』を繼承し、『文選』は更にそれを踏まえているとする。

一方で、『藝文類聚』に始まり朱自清に至るまで、阮籍詩をめぐる言説の中で、「言志」という言葉がしばしば顔を覗かせるのも事實である。では、どうして當時、既に熟しよく用いられていた「言志」ではなく、新たな「詠懷」という言葉が彼の作品のタイトルとなったのだろうか。

本論では、「詠懷」と阮籍詩が結びついた経緯をいま一度整理した上で、「詠懷」と名づけられたことの意味、言い換えれば、他の言葉ではなく、「詠懷」という題によって初めて表現され得た阮籍作品の特質を探ることを目的とする。あわせて「詠懷」と「言志」の違いの一端を明らかにできればと考える。

## I. 阮籍詩と「詠懷」

「詠懷」は、阮籍詩と常にわがちがたく結びつけられ、その文學のあり方を象徴してきた言葉である。しかし、阮籍自身が自らの作品を指して「詠懷」と呼んだわけではない。少なくともそれを直接示す文献資料はない。本論文では、のちに「詠懷」詩と呼ばれることとなる阮籍の一連の作品を「先ず「阮籍詩」と呼ぶこととする。

阮籍に関する早い段階の記録は、例えば、陳壽（二三三～二九七）『三國志』、孫盛（生卒年未詳・西晉末から東晉にかけての人）『魏氏春秋』、袁宏（三三八？～三七六？）『七賢序』等に散見される。それぞれ、「瑀の子、籍、才藻艷逸にして、倜儻放蕩、行己寡欲、莊周を以て模範と爲す」<sup>(3)</sup>「籍、曠達にして不羈、禮俗に拘らず。性は至孝、喪に居り常檢に率わずと雖も、而して毀幾ど滅性に至る」<sup>(4)</sup>「阮公、瓌傑の量、俗に移らず」、<sup>(5)</sup>といずれも彼の規則にとらわれない側面、禮教に拘束されない生き方、あるいは超俗的に生きたことへの賞賛を記す。最初に挙げた『三國志』において、「才藻艷逸」と彼の文才についてやや觸れるが、それも彼が拔き出した人物であることを印象付ける要素の一つとして着目した側面が強いよ

うに思われる。阮籍の生前及び死後間もない頃、人々の關心を引き付けていたのは何よりもまず異彩を放つその人物像であることが窺われる。

阮籍の作品そのものが注目されるようになるのは、彼の死後百年経ったのちのことである。先蹤として、顔延之(三八四〜四五六)が擧げられる。彼は、のちに「詠懷詩」と呼ばれることとなる阮籍の一連の作品に注を施す。とりわけ、「阮籍は晉の文の代に在り、常に禍患を慮り、故に此の詠を發するのみ」(『文選』卷二十三、阮籍「詠懷詩十七首」の李善注に引く顔延之注)と作品内容と亂世という特殊な成立背景とを關連付けたことばは、後世に大きな影響を興え、難解として知られる阮籍詩を讀むとき依據するところとなつてきた。<sup>7)</sup>

劉義慶(四〇三〜四四四)の『世說新語』には阮籍のエピソードが多く見える。文學篇に彼が「鄭沖の爲に晉王を勸むるの牋」を作つた際の逸話を收録する。

魏朝、晉の文王を封じて公と爲し、禮に九錫を備う。文王固く譲りて受けず。公卿將校當に府に詣りて敦喻すべし。司空鄭沖馳せて信を遣して阮籍に就いて文を求む。籍時に袁孝尼の家に在り、宿醉して扶け起こされ、札に書して之を爲り、點定する所なし。乃ち寫して使に付す。時人以て神筆と爲す。<sup>8)</sup>

ここでは、阮籍が袁孝尼(準)の家にいて、酔いつぶれたところを助け起こされ、即興で書き上げた文章が「鄭沖の爲に晉王を勸むるの牋」であること、またその完成度の高さゆえ當時の人々が「神筆」と稱したことが紹介されている。のちに『文選』(卷四十)にも採られることとなるこの文章が推敲を経たものではなく、酩酊の状態で一氣に書き上げられたとするこの逸話は、阮籍の文學の才能をより一層際立たせるものである。<sup>9)</sup>時代が下るにつれ、彼の文學に關する記述は徐々に増える。こうした流れの中にあつて、六臣注系統『文選』の五臣注(劉良)が引く臧榮緒(四一五〜四八八)『晉書』には、阮籍詩に呼稱ともいふべきものが付される。

籍は東平の相を拜するも、政事を以て務めと爲さず、酒に藩る日多し。善く文論を屬る。初めより苦思せず、率爾に便ち成る。五言陳留八十餘首を作り、世の重んずる所と爲る。<sup>10)</sup>

ここに見える「陳留八十餘首」とは、のち「詠懷詩」と名付けられた作品群に他ならない。「詠懷」に先行してここに見える、阮籍の出身地に據

った「陳留」という二文字は、文獻上において初めて確認される阮籍詩の呼稱というべきものである。

ただ、上記の引用部分の臧榮緒『晉書』には異同が見られ、『文選』卷二十一顔延之「五君詠」の李善注では、「五言陳留八十餘首」を「五言詩詠懷八十餘篇」に作る。<sup>①</sup>臧榮緒『晉書』は既に散逸しており、遑つて確認することはできないが、同じ書物の同じ箇所引用にも関わらず、齟齬が生じていることを考えれば、兩者のうちいずれかが誤った形で引用していることになる。「詠懷」が阮籍詩の題として浸透するのは後世においてである。もともと「陳留」であつたところを、のちの人が引用、轉寫の際、阮籍のイメージに合わせて「詠懷」に書き改めたことは充分に考えられる。しかし、「詠懷」であつたところを後世の人が「陳留」に誤るとは考えにくい。臧榮緒『晉書』の元の文字は「陳留」であつた蓋然性が高いといえよう。この「陳留」が阮籍詩の最初の呼稱であつたとすれば、「詠懷」というタイトルは阮籍自身がつけたところか、彼の死後二百年を経てなお定着していなかつたということになる。

臧榮緒とほぼ同じ時期に活躍していた沈約(四四一―五一三)は、顔延之に續き、阮籍詩に注をつける。<sup>②</sup>『文選』卷二十三「詠懷詩十七首」其十二「徘徊蓬池上」の結句「豈惜終憔悴」に對する)彼の注に、「詠懷」という言葉を直接用いていないものの、それに通ずる發想が見出される。

蓋し應に憔悴すべからざるに由りて憔悴を致す。君子其の道を失うなり。小人は其の功を計りて通じ、君子は其の常を道とするも塞がる。故に憔悴を致すなり。眺望に因りて懷い多く、兼ぬるに羈旅 匹無きを以てして、此の詠を發す。<sup>③</sup>

小人が世に幅をきかせ、堂々たる君子が行き詰つてしまう世相に、阮籍詩のいうところの「憔悴」の原因を求める。續けて、遠くを眺めやれば、「懷」<sup>わ</sup>いが次から次へと湧き起り、仲間のいない孤獨な旅路にあつて、こうした詩作(詠)が生まれたのだと創作背景に言が及ぶ。「詠」<sup>うた</sup>が生み出された契機として「懷」<sup>わ</sup>いに着目する。

江淹(四四四―五〇五)は、従前の五言詩から三十首を選びとり、それらに倣つた「雜體詩三十首」(『文選』卷三十一)を作る(四七九年以前の作)。模擬する元となつた詩の特徴を二文字において捉え、それを詩題に注記する。<sup>④</sup>阮籍詩に「詠懷」と付した「阮步兵詠懷(籍)」が、文獻上において確認される兩者を結びつけた先驅である。彼の死から二百年以上経つたのちのことである。

續いて鍾嶸(四六八―五一八)の『詩品』(五一八年までの四、五年間に成立)では、阮籍を上品に置き、その詩作を「詠懷の作」と呼ぶ。

其の源は小雅より出づ。雕蟲の功無し。而して詠懷の作、以て性靈を陶し、幽思を發すべし。言は耳目の内に在り、情は八荒の表に寄す。洋洋乎として風雅に會し、人をして其の鄙近を忘れ、自ら遠大を致さしむ、頗る感慨の詞多し。厥の旨は淵放にして、歸趣求め難し。顏延年の注解、其の志を言うを怯る。<sup>15</sup>

言葉に推敲の形跡がなく自然であること、「感慨の詞」が多いこと、そこに詠われている内容は深遠で難解であること。鍾嶸は阮籍詩の表現の特質をこのように分析した上で、顔注を引き、その表現の孕む現實との緊迫感を示唆する。また、対象として取り上げた阮籍詩を直ちに「詠懷の作」と呼ぶことから、鍾嶸、あるいはその周辺では「詠懷」が阮籍の作品群を示す語として浸透していた印象を受ける。<sup>16</sup>

「雜體詩三十首」、「詩品」を経て、蕭統（五〇一—五三二）が編んだとされるアンソロジー『文選』が世に問われると、「詠懷」は阮籍詩の呼稱としていよいよ定着し、以後繼承されていく。『文選』に設けられた「詠懷」という部は、阮籍「詠懷」十七首、謝惠連「秋懷」一首、歐陽堅石「臨終詩」一首の計十九の作品で構成される。<sup>17</sup>部立てに占める阮籍詩の割合のみならず、阮籍詩から部の名稱をとっていることから窺われるように、彼の作品を収録することを想定して立てられた部であるといえよう。假に、『文選』に「詠懷」という部立てがなかったのなら、彼の一連の作品はあるいは「雜詩」の部に収め入れられたのかもしれない。<sup>18</sup>阮籍詩を「雜詩」に合流させることなく、「詠懷」を新たに設けたことにより、このことは、阮籍という一作者の個性を超えて一つの文學のスタイルとして確立する。<sup>19</sup>『文選』が一つの畫期といえる。

阮籍詩と「詠懷」、兩者がどのようにして結びついたのか、周邊資料からそれを浮かび上がらせようとするれば、上記の三つの書物（作品）、すなわち「雜體詩三十首」「詩品」「文選」が手がかりとなる。特筆すべきは、三つの文獻資料がいずれも、文學が織り成す歴史的展開の中で、その體系化を試みている点である。「雜體詩三十首」では、模擬の対象を選び取り、それぞれの題に付された注からも窺われるように、異なるスタイルの作品を抽出する。「詩品」では、「古詩十九首」と漢から梁にいたる詩人百二十二人をランク付ける。「文選」では、異なるジャンル、スタイルの作品を整理分類する。こうした批評的な営みを試みる中で、「詠懷」は阮籍詩と結びつき、浸透していくこととなる。

作り手と受け手、「詠懷」は阮籍詩が流通する過程で、後者がつけたものである。では、阮籍詩のどのような特徴が「詠懷」と結びついたのだろうか。次の章において、このことについて少し考えていくこととする。

## II. 阮籍詩の特質

これまで阮籍詩は多方面から論じられてきた。<sup>20</sup> 一方で、緊迫した時代のただ中に身を置き、生命への慮惧から一連の作品が詠まれたとする顔延之の注「阮籍は晉の文の代に在り、常に禍患を慮り、故に此の詠を發するのみ」は、長い間、その解釋の方向性を規定してきたように見受けられる。たとえば先に挙げた『詩品』(卷上)では、「厥の旨 淵放にして、歸趣 求め難し。顔延年の注解、其の志を言うを怯る」と、顔注に觸れつつ、阮籍詩の特質をそれが生み出された場の特殊性と結びつけて理解する。これ以降も、阮籍詩はしばしば社會と個の對立、あるいは不本意な社會とそこに身を置く疎外感、嫌惡感という枠組みの中で受容されていく。

内容に関しては、『詩品』の言葉を借りれば「頗る感慨の詞多し」、「文心雕龍」(才略篇)では「阮籍氣を以て詩を命ず」とある。<sup>21</sup> いずれも「感慨」「氣」といった内面の目に見えないものが作品に多く表されていることを特徴として挙げる。八十二篇から内面の有り様に關わる語句を抜き出してみるとおおよそ次のようになる。

憂思 (1) 結中腸、離傷 (2) 切怛 (7) 心悲 (8) 悽愴 (9) 感慨、辛酸、怨毒、咨嗟 (13) 殷憂、心悲 (14) 哀傷 (16) 歎息 (18) 感傷 (19) 嗟嗟 (20) 殷憂、怊悵 (24) 咨嗟 (25) 殷憂 (28) 悽愴 (29) 懷湯火、心焦 (33) 哀楚、悽愴、酸辛 (34) 哀傷、辛酸 (37) 嗟哉、哀哉 (40) 躊躇 (41) 樂極、哀深 (45) 憂戚 (47) 惆悵、垂涕 (49) 哀情 (52) 驕腸 (53) 憤懣、煩心 (54) 惻愴、悅懌 (55) 歎歎、憤懣 (59) 長歎 (60) 哀情、悔恨 (61) 多慮、寂寞、心憂 (63) 鬱然 (64) 酸辛 (65) 涕下 (66) 怨毒、咄咄 (69) 慷慨 (71) 志惑、心憂、反側、相讎 (72) 咄嗟 (74) 咄嗟、苦憂、讐怨 (77) 慷慨、咨嗟、愁苦 (78) 愴悵、心傷 (79) 慷慨 (80) 咨嗟 (82)

( ) 内の作品番號は『阮籍集校注』に基づく

全篇にわたって、他者との軋轢、孤獨、喜怒哀樂といった内面の感情、感慨が多く詠われていることが窺われよう。また、感情表現そのものの豊かさにも目を見張るものがある。

しかし、これだけ多くのことを残しながらも、そのいずれもが晦澁で難解である。社會との關係が明示されている、あるいは作品内容とその成立背景がある程度リンクしていることが建安詩の特徴であるとすれば、阮籍詩に表現された世界はそうした關係性を隠蔽する方向に傾く。當時

の時代状況を意識させつつも、何一つとして現實社會との關係を結べない曖昧さ、それこそが阮籍詩の難解さなのである。受け手はそこに作り手の「感慨」「氣」を感じ、またそれによって何らかのイメージは喚起されるものの、具體性を伴わない文脈の中で語られる抽象的な感情に踏み込むのは難しい。阮籍詩に見られる内面の吐露は、他者にわかりやすく伝えることを第一義としない特徴が挙げられる。

前出の沈約注では、「兼ぬるに羈旅 匹無きを以てして、此の詠を發す」と作品の創作背景を想像した。沈約もまた右のような阮籍詩の特殊性を感じ取っていたように思う。阮籍詩を他者との関わりが持てない環境の中で詠出された「詠」であると捉えたこと、すなわち、その感情の表出を、それに共感してくれる他者を意識する前の、思いを吐き出すことそれ自體が詠む行為に繋がっていると理解したということである。

「懷」いを「詠」うという作り手の文學營爲がそのままタイトルになっていることから窺われるように、内面にある感情を外に詠出したことが阮籍詩の最たる特徴として人々に鮮やかな印象を残した。しかし、讀者たちは、「厥の旨 淵放にして、歸趣 求め難し」と『詩品』にも評されているように、同時にその吐露の特殊性にも氣づいていた。阮籍詩に見られる内面の表出は、行為の先に存在するはずの他者に伝えることを目的としない、あるいは第一義としない、言い換えれば、表出そのものによって完成される表出なのである。

内面の表出という点からいえば、當時既に熟していた「言志」という言葉があった。「詠懷」ではなく「言志」という言葉を用いて差し支えない、と朱自清が述べたように、「言志」でもって阮籍詩を特徴づけることもできたはずである。次の章において、「詠懷」側から、それが阮籍詩と結びついた所以をさぐっていくこととする。

### Ⅲ. 「詠懷」という言葉

「詠懷」という言葉に関して、『文選』李善單注には見えないものの六臣注・六家注ともに李善の言葉として引かれた次の一節の中において既に言及されている（卷二十三阮嗣宗の注の部分）。

詠懷とは、人の情懷を謂う。籍、魏末晉の文の代に於いて、常に禍患の己に及ぶを慮る、故に此の詩有り。多くは時人の故舊の情無く、勢利を逐うのみなるを刺る。其の體趣を觀るに實に幽深と謂えり。夫の作者に非ざれば之を探測すること能わず。

ここでは「詠懷」について、「人の情懷を謂う」とすなわち内面の感情世界を詠うことであると語義を明示する。合わせて、作品が成立した特殊な時代背景、及び作者本人でなければ推し量ることのできない表現の難解さを指摘する。創作理論を蒐集した『文鏡秘府論』南卷では「詠懷とは、其の懷抱の事を詠じて興と爲すこと有る、是なり」と見え、「懷」を「懷抱の事」と解し、それが「興」を通して表現されたものである、と述べる。<sup>(24)</sup> また、大上正美氏はその著作において、この『文鏡秘府論』を引いた上で、阮籍詩と結びつけ、「一事を歌うのではなく、自己の心を見据え、その胸底をより直接的に歌い上げ、自己をより根源的により全體的に表現した」ものだと述べている。安藤信廣氏はその著作の中で「詠懷」という行爲の一節を設け、「詠懷」とは、自己の感慨の表層や一部の表現ではなく、その見えざる本質（幽思）または全體的表現であらうとする文學的行爲と考えられる<sup>(25)</sup>と分析する。

これらの多くは、阮籍詩をはじめ「詠懷」と名付けられた作品をいったん受け止め、その読みを通して歸納的に作り上げられた理解である傾向が指摘できる。加えて、右に挙げたいずれもが「詠懷」の「懷」により重きを置き、解き明かそうとすることに傾斜する。ここでは、こうした先行研究を踏まえつつ、それとは異なる視點から「詠懷」ということばについて考えてみたい。

「詠懷」が一語として定着する前、「懷<sup>(26)</sup>」いが文學を生み出すという自覺は、既に文學作品の中に見出される。例えば、曹叡（二〇六―二三六）「苦寒行」（『樂府詩集』卷三十三）では、「悠悠として洛都より發し、我をして東行に征かしむ」と詠いおこし、都から東へ從軍していく主人公の「我」の現狀を示したのち、その心情が綿々と吐露される。一連の吐露は「詩を賦して以て懷<sup>(27)</sup>いを寫<sup>(28)</sup>ぎ、賦に伏して涙<sup>(29)</sup>を沾す」によって結ばれる。ここでは、「懷」いは「詩を賦す」行爲と結びつけられている。

曹叡より少しのちの傅咸（二三九―二九四）の詩「何劭 王濟に贈る」（『文選』卷二十五）に付された序文にも同様の認識が確認される。

何公既に侍中に登り、武子俄にして亦た作こる。二賢相得て甚だ歡び、咸も亦た之を慶ぶ。然れども自ら恨む 闇劣にして、其の縫綬を願うと雖も、之に従うに由末きを。歷試も效無く、且つ家艱有り、詩を賦し懷<sup>(30)</sup>いを申べ、以て之に貽ると爾云う。

傅咸は何劭、王濟と血縁關係にある。序文では「何公（何劭）」「武子（王濟）」「咸（傅咸）」と具體的に名前を挙げ、作品の制作背景が示される。何劭、王濟の昇進及び榮達を喜び、自らの不遇、親の不幸が重なった現狀をふり返り、「詩を賦」することによって、「懷」いを「申」べ、二人へのメッセージとする、という。ここでの「懷」いは何劭、王濟という具體的な對象を持ち、作品創作はこうした「懷」いを下支えとする。この

二作品中に見られる「寫懷」「申懷」は、のちの阮籍の文學を特徴づけた「詠懷」と同じ概念が含まれている。

更に、胸の内にかえる感情を表出すべきものとして意識することは、「離騷」(『文選』卷三十二)にまで遡ることができる。「朕が情を懷きて發せず、余焉んぞ能く忍びて此と終古せん」、と溢れんばかりの感情を「懷」きながらも吐露することができず、わたくしはどうしてこの君と最後まで全うすることができよう、と詠う。内に「懷」く「情」を外にさらけ出すことが強く志向される。また、宋玉「神女賦」(『文選』卷十九)では、「情を獨り私に懷え、誰者にか語るべき。惆悵して涕を垂れ、之を求めて曙に至る」と、神女に對する戀慕を述べる一節にも同じような意識が見出される。

しかし、「神女賦」では「離騷」の表現とは異なり、感情の表出を志向するが、その表出はここでは、對象がいて初めて完成されるものとして表現されている。これに對し、「離騷」は、内面の表出そのものに焦點が當てられている。前者は「語」、後者は「發」を動詞に用いる。

こうした相に目を向けていくと、「何劭王濟に贈る」の序文に見える「懷いを申べる」の「申」は、宋玉「神女賦」と同じように、對象がいて初めて完成される表出であり、曹叡「苦寒行」に見える「寫」ぐは「離騷」の「發」と同じように、表出そのものによって完成される行爲であることがわかる。

内面の表出をめぐるこうした抽象的概念は、作者自身がどこまで意識していたのかは議論の餘地はあるが、前者が、「語」「伸」という他者の存在を意識させる動詞を選び取っていた點に鑑みれば、それを感覺的に把握し、使い分けていたのではないかと考える。

さて、阮籍詩のタイトルとなっている「詠懷」とりわけ「詠」は、兩者のうちいずれに傾く表現であるのだろうか。『尚書』舜典では「詩は志を言い、歌は言を永じ、聲は永に依り、律は聲に和す」とある。ここに見える「永」は「詠」に通じ、言葉を長く伸ばしながら發することである。『禮記』檀弓篇下では、「人喜べば則ち斯に陶す、陶すれば斯に詠う」とあり、鄭玄が「詠、嘔なり」と注を施している。一定のリズムをつけながら聲を伸びやかに發すること、これが「詠(永)」の第一の意味であろう。(「懷」は言うまでもなく抽象的な感情、思である。『詠』と「懷」、二つの文字を改めてつなげてみると、内面の「懷」いを伸びやかな聲にして外にさらけ出すこと、おおよそこのような意味となる。)

更に、「詠」によって喚起される表出の相に目を向ければ、『尚書』舜典、『禮記』檀弓篇はいずれも「詠」を自發的な感情の表出として捉える點において共通する。こうした「詠」のあり方は、『詩』大序にも見出すことができる。「情中に動きて、言に形わる。之を言うて足らず、故に之を嗟嘆す。之を嗟嘆して足らず、故に之を永歌す。之を永歌して足らず、手の之を舞い、足の之を踏むを知らず」とある。「永(詠)」は、感情があふれ出るとき、自然に行われる行爲の一つとして位置付けられている。

後世において、内面の表出に際して「詠」が用いられるとき、やはりこうした傾向が見出される。嵇康「聲無哀樂論」(『全三國文』卷四十九)では、この『詩』大序を踏まえ、論を展開する。

夫れ内に悲痛の心有れば、則ち激切哀言。言比べて詩と成り、聲比べて音と成る。雜えて之を詠ず。(中略)情性を吟詠して以て其の上を諷す。故に曰く亡國の音哀しみて以て思ふなり。<sup>33)</sup>

「悲痛の心」が生じれば、ことばに反映され、「詠」を介して表現される、という。ここでも、膨れ上がった感情を吐露する行爲として「詠」が取り上げられている。

このように見ていくと、「詠懷」とりわけ「詠」によって喚起される表出のあり方と、第二章において確認される阮籍詩が人々に與える印象とは重なるものがある。他者に伝えることを目的としない、あるいは第一義としない阮籍詩における表出の特質が、ちょうど「詠」という文字によってうまく掬いとられているのである。

阮籍詩は、たとえば顔延之「五君詠」(『文選』卷二十一)の中で「託諷」と評されたように、後世においてその社會的機能がしばしば取り上げられる。これも「詠」という行爲のあり方に通ずるものがある。先に挙げた『詩』大序の續きに「治世の音、安くして以て樂しむ。其の政、和すればなり。亂世の音、怨みて以て怒る。其の政、乖けばなり。亡國の音、悲しみて以て思ふ。其の民、困しめばなり」とある。「永(詠)」を通して表現された音、ことばに「治世」「亂世」「亡國」といった社會、政治のあり方を示す機能が付されている。同じように嵇康「聲無哀樂論」においても、「詠」が出されたことばは、「其の上を諷す」役割があると後文にて明記する。

なぜという疑問が意味をなさないほど、「詠懷」は阮籍詩のタイトルとして確固たる地位を築き上げてきた。「詠懷」がそのタイトルとして定着した理由を改めて考えてみると、「詠懷」とりわけ「詠」によって喚起されるイメージが、作品の有する個性を上手く表現し得ていることとは無関係ではないだろう。

おわりに

阮籍詩と「詠懷」を結びつけた先驅として何よりもまず、江淹が挙げられる。江淹について、『詩品』卷中に「文通は詩體總雜にして、摹擬を善くす」とあり、實際、その現存するおおよそ半數が模擬の作である。中でも、彼がもつともよく模擬した文人のひとりが他ならぬ阮籍である。阮籍の文學によく親しんでいた彼が「詠懷」という言葉こそがその作品に相應しいと考え、「雜體詩三十首」のタイトルに注記したのは興味深いことである。彼は、なぜ他のことば、例えば「言志」ではなく、「詠懷」でもって阮籍詩を特徴づけたのだろうか。

同じ「雜體詩三十首」の中で、彼は「言志」を嵇康の文學の特徴を表す言葉として用いている。「詠懷」と「言志」、概念の重なり合う二つの言葉ではあるが、少なくとも江淹が「雜體詩三十首」を作るに際しては、二つを異なった詩作のテーマとして認識していたようである。嵇康の作品に模擬した江淹の「嵇中散（康）言志」を挙げよう。

曰余不師訓 曰に余 師訓あらず

潛志去世塵 志を潜めて世の塵を去る

遠想出宏域 遠く想いて宏域を出で

高步超常倫 高歩して常倫を超ゆ

（中略）

莊生悟無爲 莊生 無爲を悟り

老氏守其眞 老氏 其の眞を守る

天下皆得一 天下 皆一を得ば

名實久相實 名と實と久しく相實す

咸池饗爰居 咸池もて爰居を饗するも

鍾鼓或愁辛 鍾鼓 或いは愁辛たらしめん

柳惠善直道 柳惠 直道を善し

孫登庶知人 孫登 人を知るに庶し

寫懷良未遠 懷いを寫して良に未だ遠からず

感贈以書紳 感じて贈り以て紳に書す

俗世から遠く離れ、超俗の世界に精神をあそばせたい願望からうたい興し、柳下惠、孫登の出處進退を稱えた上で、作品を作った所以を述べて、うたい収める。柳下惠のように俗世に身を置き、社會と對立しながら全うする生き方を評價しつつも、そこから遠く離れることにところを傾ける。この江淹「雜體詩三十首」に遲れて成立した書物『文選』、その賦のジャンルの中に卷十四から十六に跨り「志」の部が設けられている。その目録及び題下注（李善）を以下に掲げる。<sup>39</sup>

1. 班固「幽通賦」

漢書に曰く、班固 幽通賦を作りて以て命を致し志を遂ぐ。賦に云う、幽人の髣髴するを覲る。然るに幽通は、神を遇うを謂うなり。

2. 張衡「思立賦」

順、和二帝の時、國政は稍微にして、内豎に専恣せらる、平子 政事を言わんと欲するも、又た奄豎の讒蔽する所と爲り、意 志を得ず、六合の外に遊ばんと欲するも、勢として既に能わず、義としても又た可ならず。但だ其の玄遠の道を思いて之を賦し、以て其の志を申ぶるのみ。

3. 張衡「歸田賦」

張平子 歸田賦は、張衡仕えて志を得ず、田に歸らんと欲す、因りて此の賦を作る。凡そ在りては朝と曰い、歸田と曰わす。

4. 潘岳「閑居賦」

閑居賦は、此れ蓋し禮篇に取る、世事を知らずして閑靜居坐の意なり。

「幽通賦」「思立賦」「歸田賦」「閑居賦」とそのタイトルからも窺われるように、いずれも俗世から離れることを主旨とする作品である。題下注には、世俗を強く意識しながらも、そこから離れることを述べたものであることが記される。江淹の作品に窺われる「言志」の「志」と『文選』の「志」の部によつて示される「志」は、いずれも俗世のあり方と深く結びつきつつ、隱逸へと向かうものである。

多様に展開する作品を體系化するに際し、とりわけ江淹が生き、『文選』が編纂された齊・梁、すなわち阮籍詩が「詠懷」と結びつき、そのタ

注

イトルとして定着した時期において、それぞれの作品が持つ個性に準じて整理分類するとき、「言志」の「志」は「矢志」のそれがまず意識されたのではないだろうか。そして、それが「脱俗の志」へとつながっていく。このときの「志」はより狭義なものであるといえよう。

そのため、吐露された曖昧な感情によって形作られた阮籍詩は、「言志」という枠組みに収まるものではなかった。そこで、阮籍の詩作は、「詠懷」という新たなそして、よりの確な言葉によって區別されたのではないだろうか。<sup>(35)</sup>

紙幅の関係で江淹が阮籍の文學のあり方をどのように捉えたのかについて、充分に論じることができなかった。このことは次の課題としたい。

- (1) 上海古籍出版、一九九八、P三五「詩題詠懷、其實換成言志也未嘗不可」
- (2) 「昭明『文選』における「詠懷」の成立」(『福岡教育大學紀要』第四十二號、一九九三)
- (3) (原文)「瑀子籍、才藻艷逸、而倜儻放蕩、行己寡欲、以莊周爲模則」(『三國志』卷二十一)
- (4) (原文)「籍曠達不羈、不拘禮俗。性至孝、居喪雖不率常檢、而毀幾至滅性」
- (5) (原文)「阮公瓌傑之量、不移于俗」(『太平御覽』卷四四七)
- (6) 顏延之は「詠懷詩」の注釋者として有名だが、「五君詠」という作品をも作っており、その中で、阮籍の詩作「寓辭類託諷」と、「託諷」と捉えている。
- (7) 例えば、鍾嶸『詩品』、何遜汶『竹莊詩話』、楊慎『詩話補遺』、何焯『義門讀書記』、陳沆『詩比興箋』、黃侃『詠懷詩補注』などの中において、顏延之の注への言及がある。
- (8) (原文)「魏朝封晉文王爲公、備禮九錫、文王固讓不受。公卿將校當詣府敦喻。司空鄭冲馳遣信就阮籍求文。籍時在袁孝尼家、宿醉扶起、書札爲之、無所點定、乃寫付使。時人以爲神筆」
- (9) 『世說新語』には、阮籍の詩作について直接言及していないものの、豪爽篇に「桓玄西下、入石頭、外白司馬梁王奔叛、玄時事形已濟、在平乘上箛鼓竝作、直高詠云、簫管有遺音、梁王安在哉」とあり、ここで引用された「簫管有遺音、梁王安在哉」二句は、阮籍「詠懷詩」其三十一に見える句である。
- (10) (原文)「籍拜東平相、不以政事爲務、瀆酒日多。善屬文論。初不苦思、率爾便成。作五言陳留八十餘首、爲世所重」
- (11) (原文)「籍拜東平相、不以政事爲務、沈醉多日。善屬文論。初不苦思、率爾便成。作五言詠懷八十餘篇、爲世所重」
- (12) 『文選』に採られている十七首のうち十首に合計十七條の注が残されている。また、今場正美氏はその論稿「東晉侯治下における沈約と阮籍「詠懷詩」注について」(『學林』第三十六・三十七號、二〇〇三)において、沈約注は沈約が東晉侯(四八三〜五〇一在位)に仕えていた時期のものではないかと推測する。今場氏の説に従うならば、沈約注は江淹「雜體詩三十首」よりあとに成立したことになる。

- (13) (原文)「蓋由不應憔悴而致憔悴、君子失其道也。小人計其功而通、君子道其常而塞、故致憔悴也。因乎眺望多懷、兼以羈旅無匹而發此詠」
- (14) 「雜體詩三十首」のタイトルは次のとおりである。1 古離別 2 李都尉「從軍」(陵) 3 班婕妤「詠扇」 4 魏文帝「遊宴」(曹丕) 5 陳思王「贈友」(曹植) 6 劉文學「感遇」(楨) 7 王侍中「懷德」(粲) 8 嵇中散「言志」(康) 9 阮步兵「詠懷」(籍) 10 張司空「離情」(華) 11 潘黃門「悼亡」(岳) 12 陸平原「羈宦」(機) 13 左記室「詠史」(思) 14 張黃門「苦雨」(協) 15 劉太尉「傷亂」(琨) 16 盧中郎「感交」(誼) 17 郭弘農「遊仙」(璞) 18 張廷尉「雜述」(綽) 19 許徵君「自序」(詢) 20 殷東陽「興屬」(仲文) 21 謝僕射「遊覽」(混) 22 陶徵君「田居」(潛) 23 謝臨川「遊山」(靈運) 24 顏特進「侍宴」(延之) 25 謝法曹「贈別」(惠連) 26 王徵君「養疾」(微) 27 袁太尉「從駕」(淑) 28 謝光祿「郊遊」(莊) 29 鮑參軍「戎行」(昭) 30 休上人「別怨」。江淹は「詠懷」を阮籍詩のタイトルとしてではなく、あくまでもその特徴を言い表したことがばとして意識していた。江淹は上記以外の阮籍詩を模倣した作品も残しており、そのタイトルが「效阮公詩(十五首)」となっている。「詠懷」が阮籍詩のタイトルとして浸透したあとに作られた庾信(五一三〜五八二)の模倣作は、そのタイトルを「擬詠懷詩」としている。
- (15) (原文)「其源出於小雅。無雕蟲之功。而詠懷之作、可以陶性靈、發幽思。言在耳目之內、情寄八荒之表。洋洋乎會於風、雅、使人忘其鄙近、自致遠大、頗多感慨之詞。厥旨淵放、歸趣難求。顏延年注解、怯言其志」
- (16) 『世說新語』の劉孝標(四六二〜五二二)の注に「阮籍詠懷詩」との言葉が見える。酈道元『水經注』(？〜五二七)にも「阮籍詠懷詩」との言葉がある。
- (17) 謝惠連の「秋懷」は、秋の夜にわきおこった人生の感慨が詠う。歐陽堅石の「臨終詩」に關しては、罪に問われ、死ぬ前の嘆きが吐露されている。「臨終」という題からも窺われるように、極めて深刻な内容といえる。いずれも、人の生と死に向き合い發された言葉である。
- (18) 「雜詩」ではなく、新たに「詠懷」の部を設けたのはなぜか。一つは、八十首にも及ぶ連作であったためと考えられる。同じように、膨大な作品数、一説には百篇以上あったといわれる應璩(二九〇〜二五二)「百一詩」を収めるのに「百一」という部が設けられている。また、「詠懷」は文學營爲をそのまま言語に置き換えた言葉であり、他の作品と共有されるうる要素を兼ね備えているだけでなく、顏延之、沈約が注をつけ、江淹がそれを模倣したように、多くの文人が注目し後世に影響を與えたことも理由のひとつとして考えられる。
- (19) このことは、唐人がしばしば「詠懷」を詩題に用いることに端的に表れている。以下にいくつか挙げる。王績「詠懷」・駱賓王「詠懷古意上裴侍郎」・杜甫「詠懷 駱賓王自京赴奉先縣詠懷五百字」・杜甫「詠懷二首」・杜甫「詠懷古跡五首」・杜甫「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」・劉禹錫「歲夜詠懷」・孟郊「詠懷(一作詠情、一作感寓)」・張籍「詠懷」・李賀「詠懷二首」・白居易「詠懷」・白居易「香鑪峰下新置草堂即事詠懷題於石上」・白居易「詠懷」・白居易「端居詠懷」・白居易「閒夜詠懷因招周協律劉薛二秀才」・白居易「答微之詠懷見寄」・李商隱「詠懷寄秘閣舊僚二十六韻」・賈島「詠懷」
- (20) 例えば、吉川幸次郎氏はその著作「阮籍「詠懷詩」について」(岩波書店、一九八二)において、阮籍「詠懷詩」が五言詩の歴史における意義について様々な側面から論じている。大上正美氏は、『阮籍・嵇康の文學』(創文社、二〇〇〇)において、表現者として阮籍が表現し続けることの意味について考察する。
- (21) (原文)「嵇康師心以遺論、阮籍使氣以命詩、殊聲而合響、異調而同飛」。阮籍の「氣」に對して、嵇康は「心」である。
- (22) 「詠懷」が熟して用いられるようになるのは、ちょうど阮籍詩と結びついた齊、梁の頃であると考ええる。それ以前に作られた文獻に「詠懷」という言葉はほとんど見られない。張載(西晉の人)や支遁(？〜三六六)に「詠懷」と題する連作詩が残っているが、そのタイトルは唐代に成書した『廣弘明集』の中で初めて確認されるもので、いつ、どのように「詠懷」と名づけられたのか詳細は不明である。

(23) (原文)「詠懷者、謂人情懷。籍、於魏末晉文之代、常慮禍患及已、故有此詩。多刺時人無故舊之情、逐勢利而已。觀其體趣實謂幽深。非夫作者不能探測」

(24) 「興」の解釋をめぐって、興膳宏氏は『弘法大師空海全集』(筑摩書房、一九八六)のなかで、「隱喻」と解す。安藤信廣氏は『庚信と六朝文學』(創文社、二〇〇八)の中で、「興」は『詩經』以來の表現理念だが、自然物・具體物を借りて、そこから連想される人事や内面を表そうとするのである」と述べる。

(25) 『中國古典詩聚花・思索と詠懷』(小學館、一九八五) P 八

(26) 『庚信と六朝文學』(創文社、二〇〇八) P 二四〇

(27) (全文)「悠悠發洛都、非我征東行。征行彌二旬、屯吹龍陂城。顧觀故壘處、皇祖之所營。屋室若平昔、棟宇無邪傾。奈何我皇祖、潛德隱聖形。雖沒而不朽、書貴垂伐名。光光我皇祖、軒耀同其榮。遺化布四海、八表以肅清。雖有吳蜀寇、春秋足耀兵。徒悲我皇祖、不永享百齡。賦詩以寫懷、伏賦源沾纓」

(28) (原文)「何公既登侍中、武子俄而亦作、二賢相得甚歡、咸亦慶之。然自恨閭劣、雖願其繼纒、而從之末由、歷試無效、且有家艱。賦詩申懷、以貽之云爾」

(29) (原文)「懷朕情而不發兮、余焉能忍與此終古」(『文選』卷三十一)

(30) (原文)「情獨私懷、誰者可語。惆悵垂涕、求之至曙」(『文選』卷十九)

(31) 鄭玄注に「永、徐音。詠、又如字」とある。

(32) 『說文解字』卷十一心部では、「懷、念思也」、『文選』卷二十三「阮籍『詠懷詩十七首』」の李善注に引く『蒼頡篇』では「懷、抱」とある。

(33) (原文)「夫内有悲痛之心、則激切哀言。言比成詩、聲比成音、雜而詠之。(中略)吟詠情性、以諷其上。故曰亡國之音哀以思也」

(34) (原文)

1. 班固「幽通賦」

漢書曰、班固作幽通賦以致命遂志。賦云、觀幽人之髣髴。然幽通、謂與神遇也。

2. 張衡「思立賦」

順、和二帝之時、國政稍微、專恣內豎、平子欲言政事、又爲奄豎所讒蔽、意不得志、欲游六合之外、勢既不能、義又不可。但思其玄遠之道而賦之、以申其志耳。

3. 張衡「歸田賦」

張平子歸田賦者、張衡仕不得志、欲歸於田、因作此賦。凡在曰朝、不曰歸田。

4. 潘岳「閑居賦」

閑居賦者、此蓋取於禮篇、不知世事閑靜居坐之意也。

(35) 「阮步兵詠懷(籍)」と名付けた江淹の模擬作は次のとおりである。「青島海上遊、鸞斯蒿下飛。浮沈不相宜、羽翼各有歸。飄飄可終年、沈瀝安是非。朝雲乘變化、光耀世所希。精衡衡木石、誰能測幽微。」生命のあり方をテーマとする作品である。